K450.5

2

師範被服

本科用

一

（第三級）

文部省

文部省調査普及局刊行課寄贈

第五節　水濯ぎ・脱水・乾燥

1. 水濯ぎ

洗濯液で洗つたものは,布に浸込んでゐる洗濯剤及び布から離脱した汚垢を十分濯ぎきる。この際從來廣く行はれてゐる振りつけ洗は,布の表面にだけ作用して組織内部にはよく及ばないから,品物の大きさに應じそれぞれ揉み洗・押付洗・もしくは踏み洗の操作を加味するのが能率的である。而して數回水を替へて行ふ。石鹸を用ひて洗濯した場合にはただちに冷水で濯ぐと石鹸分が布地に附着殘留し,その布味・色澤等を損する虞れがある。用水が硬水の場合には殊にこの缺點が著しいから注意すべきである。

2. 脱　水

水濯ぎした物は,乾燥を容易ならしめるため脱水する。襦袢・シャツ・浴衣等のまる洗したものは,なるべくすべての縫目が縦の方向になるやうに纏めこれを振つて搾るのもよいが,絹物・毛織物・人絹織物・スフ織物等は種々の不結果を生じ易いから,平板の上に疊み上げ,両手で押しつけて水を切るやうにするがよい。多人數の家庭や寄宿舍などでは遠心力を應用した小形の手廻脱水機を應用すれば,品物を傷める虞れがなく,し

かも能率的である。

3. 乾　燥

脱水した洗濯物は皺を伸ばし形態を整へ,褪色の虞れあるもの[21]以外は一般に日向に出して乾かす。毛糸や人絹の編物のやうに濡れると伸びて形態を損するやうな品物は,なるべく張力のかからぬやうに注意せねばならない。

絹物模様物等で乾く間に色のにじみ出る虞れあるものはなるべく手早く干し上げるやうに工夫する。絹物やモスリンの場合には,最後の濯ぎ水に極く少量の醋酸を加へるがよい。[22]

[21] すべて染色物は,乾燥状態に於けるよりも湿潤状態に於いて直射日光に曝露された場合に褪色する傾向が大である。故に日光に對する堅牢度の低い染色物の場合には,日蔭の風通しのよいところで乾かすがよい。

[22] 乾く間に色がにじみ出て困るやうな染色は,大體直接染料又は酸性染料を應用した場合に多い。これらの染料は動物性纖維に對し,微量の酸があると親和力を增すから,この作用を應用すると色のにじみ出るのを防ぐことが出來る。鹽基性染料で染めた絹物やモスリンを醋酸水に浸すと却つて色のにじみ出る傾向を增すから,醋酸水に浸して乾かすことがいつでも色の滲出を防ぐ効があると解してはならぬ。

第四章　洗濯後の仕上

第一節　仕上の一般

1. 洗濯後の仕上

洗濯した物には,その用途に適應する形態と布味とを與へるため仕上を行ふ。

仕上は纖維の可塑性を應用するか,更にその上に糊付による布味の改善を應用して行ふ場合が多い。

2. 糊　付

糊付は織物に特殊の布味を與へ,表面のけばを伏せもしくは一定の形を長く保持せしめることを主目的とするものである。[23]

糊付には水濯ぎ後脱水したものに施す場合と,一旦乾かしてから行ふ場合とがある。解き洗した場合には,仕事の都合上後者によるを普通とし,まる洗した場合には,前者による方が干し上げの手數を一回省く點で能率的である。

仕上用の糊料には種々あるが,一般に白物には生麩糊のやうな澱粉質を,色物にはふのりもしくは前記

[23] 毛着類絣類毛織物等には糊付しないのが普通である。

のやうな澱粉等を用ひるのが便である。澱粉類は水を加へ80乃至90°に15乃至20分間加熱して糊化させ,ふのりは數時間微溫湯に浸して膨潤せしめた後輕く煮て糊とし,これを濾して用ひる。糊液は濃い目に作つて置き,これを適宜に薄めて用ひると便利である。その適應濃度は糊付すべき織物の種類・用途或は各自の好みなどによつて異なるが,澱粉類は水 $\frac{1l}{5.5合}$ に對し $\frac{15g}{4匁}$ ふのりは $\frac{4}{1}$ 乃至 $\frac{6g}{1.6匁}$ の見當に含むものを大體の標準とするがよい。糊の効き目は糊料の種類・濃度に關する外,糊付する布帛の含水量及び糊付後の搾り方によつて著しく左右される。糊液の所要量は大體一反分に對し $\frac{1}{5.5}$ 乃至 $\frac{1.2l}{6.6合}$ と見てよい。

3. 仕上法の種別

諸種仕上法中普通に行はれてゐるものは,敷伸・板張・伸子張・湯伸・アイロン仕上等である。これらの仕上法は,織物の種類・用途によつてそれぞれ適否があるから,そのいづれによるべきかをよく考へねばならない。

第二節 諸種の仕上

1. 敷伸仕上

生乾きのときに取入れ,もし十分乾いてゐたなら霧を吹いて全體に少し濕りを與へ,布の幅丈を適度に引伸ばし,形を整へて疊みつけ,再び擴げて干し上げるのである。この場合疊んだものを莫座の間に入れて,踏みつけると一層効果がある。

2. 板張仕上

解き洗した場合に糊液を用ひ,布片を平滑な板面に皺を伸ばし形態を整へながら貼り付け,そのまま乾かして仕上げるのである。これは木綿物・絹物又はそれらの交織物等に適用される。

張り方には(1)布の表を內側に疊むやうにして糊液に入れ,糊液を十分浸み込ませ,張板の上に出し,掌で押して平均に搾り,張板に貼付する仕方,(2)張板に糊液を刷毛で引き,布の裏を板面に擴げて貼付する仕方,(3)布の裏を上に向けて板の上に擴げ,これに糊液を刷毛で引きつけ,布をかへして張板に貼付する仕方がある。

㊴ 以上の貼付法中,(2)及び(3)では,糊液は主として布の裏面につき表には自然ににじみ出た糊液が刷毛で捺でてゐるうちに平均に分布されるだけであるから,布の表の光澤がよく仕上がる。またこの方法によると染色の餘

いづれにしても布目の曲らぬやう,布幅が一様であるやうに張りつけるのであつて,布が板に落ちついたところで,空刷毛でなでて糊の分布を均等にすると同時に少しの小皺もないやうにすることが肝要である。

張板の兩面に張り終つたら,日當りのよい適當な場所に立てかけて乾かす。しかし日光に褪め易いものは風通しのよい日蔭で乾かすのがよい。兩面が乾いたら注意して剝がす。

板に接した面はとかく悪光りがしたり,乾いてから布を剝がす際にけば立つたりする缺點を伴なひがちで,眞の布味は板につかない面にあるから,表にする方を上にして貼る。

3. 伸子張仕上

元の反物の形に縫合はせた布の兩端に同じ幅で長さ $\frac{12cm}{3寸}$ 程の丈夫な布を縫ひつけ,先づ洗濯を終へ,兩端に張手をつけ縫代のある方を上に向け端縫の際と緯の縫目にだけ下側から一乃至二本づつ伸子を打ち縫目の皺を伸ばし乾かす。この場合の伸子を飛伸子といふ。次に縫代のある面に糊液を刷毛引し,その反對

り丈夫でない布を張る場合にも,糊液に布を浸してやる仕方に比べると,染色の落ちることが少なく,糊液を汚染することも殆どない。

面を上にし,同じ刷毛で糊液をつけすに擦つて糊付けを平均にし,縫代のある面を上に向け直し,適宜の間隔を置いて兩耳に伸子を打つて乾かす仕上法である。乾いたら兩耳に沿つて $\frac{4}{1}$ 乃至 $\frac{5cm}{1.3寸}$ の幅に,なるべく中央の方にぼかし氣味に水刷毛で輕く水を引き,飛伸子だけを殘して他の伸子を取り,兩手の拇指と食指で兩耳を經の方向にしごいて伸子跡を消し,張手をつめ經の方向にやや強く張つて乾かす。乾けば飛伸子をとり,一方の張手を除いて適宜にたぐり畳み,他方の張手を除き二三回はたいて布味を柔め,縫目を解き離し,縫合はせの折目と兩耳とに裏から輕くアイロンをかけて伸ばし,表裏を取違へぬやう重ねて畳み,或は卷棒に卷いておく。

用ひた伸子は弓形に曲つてゐるから,揃へて逆に曲げ眞直にしておく。

伸子張仕上は縮緬・縮緬・毛織物・スフ織物以外の地の平らな織物,特に絹織物の仕上に適し,張上後の光澤や布味は一般に板張仕上に優る。

4. 湯伸仕上

乾いた布地に熱い蒸氣を當てて纖維の可塑性を發揮させ,適度に伸ばし形態を整へる仕上法である。これは專ら縮緬・錦紗・明石等の仕上に應用される。

布が長い場合は兩端を縫合はせて輪の形とし,布の裏面を外側にしてその間に丸棒を二本入れ,これを二人が向かひあつて持ち,反對の方向に引張りながら湯伸釜から盛に出る蒸氣に觸れさせ,所望の程度に布幅を出しながら,順次布を循環させる。編物類の仕上や,編物に用ひた古い毛絲のくせを直す場合にも湯伸仕上を適用する。

5. アイロン仕上

一般に纖維は乾いた狀態にあるときよりも濕つた狀態にあるときの方が可塑性を發揮し,更に濕つた狀態のものに熱を加へるときは一層それが著しい。アイロン仕上は湯伸仕上と同樣にこの事實を應用した仕上法で,布に適度の水分を與へ,これに適度に熱したアイロンを當てて布全體の皺を伸ばしたり,或は布に所要の折目をつけ形態を整へるものである。

仕上を行ふべき布に適度の水分を與へて仕上げ臺の上に擴げ,次の點に注意してアイロンをかける。

(1) アイロンの熱度はなるべく同じ種類の纖維から成る布片に當ててその强さを調べ,その他アイロン仕上の効果を左右する既述の重要な因子について留意する

(2) アイロンをかけると,布の表面が滑澤になる。

これは特別の場合の外避くべきものであるから,一般には布の裏面にアイロンをかける。洋服その他裏面よりかけにくいものには,濕を與へてから水分のない綿布の類をあて,その上から間接にかけるか或は濕布を當てて,アイロンをかける。

(3) 布に縫目があれば縫目に沿つてかけ始め,全面に及すべく,折目その他布が二種になつてゐるところは,一重のところよりも十分にアイロンをかける必要がある。

第五章　婦人服

婦人用平常着は一部式二部式いづれでもよいが簡素のうちにもおのづからなる氣品をそなへたものが望ましい。

次に示す形式は上衣と下衣とに分れた二部式で生活活動には都合がよい。上衣は肩に二本の縫ひつまみをなし衿は幅のせまい着物衿で袖は筒袖式の長袖とし帶を附ける。下衣は六枚接ぎ又は四枚接ぎとなし襞なしで裾開きとする。

着用法は下衣を先に穿き上衣は上につけて帶を締める。

次にその製作に就いて記してみよう。

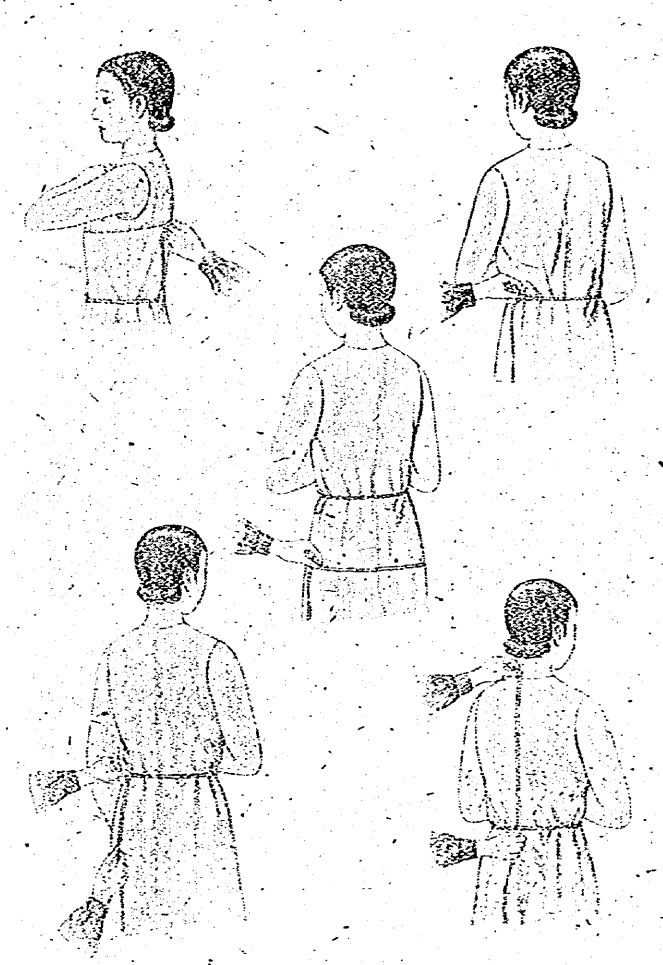
第一節 製作法

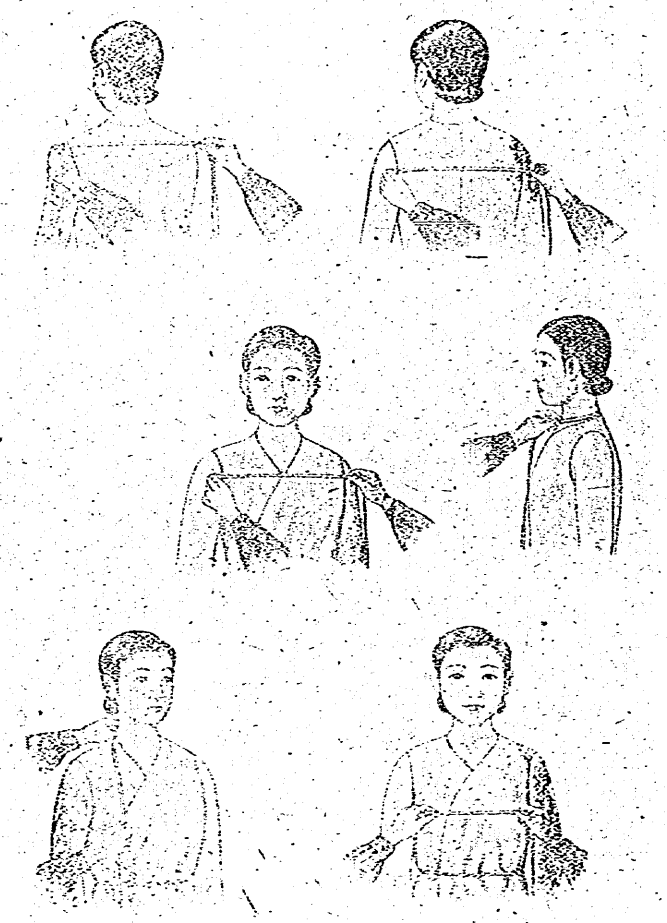
1. 寸法のはかり方

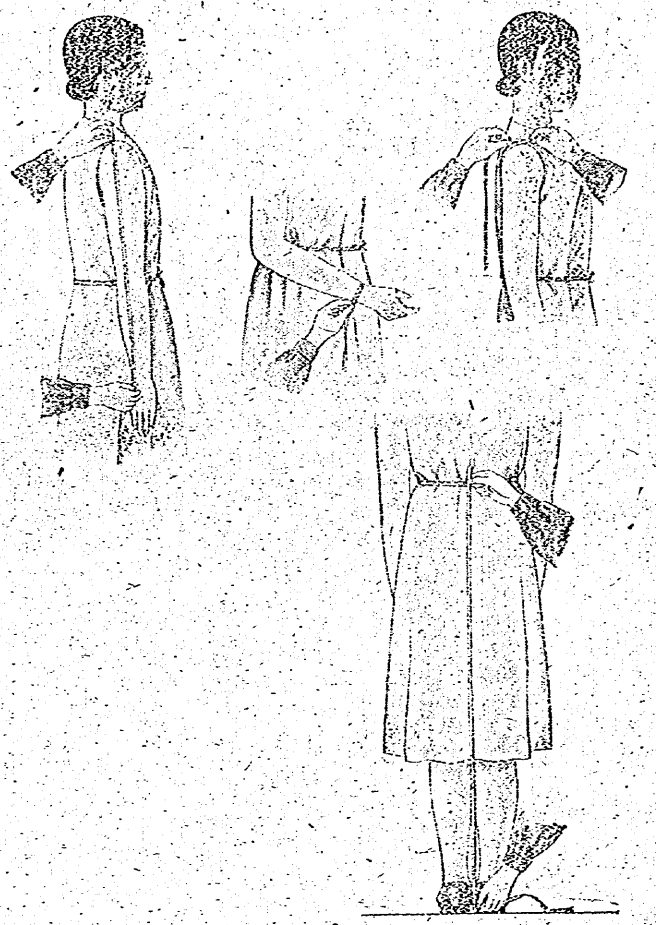
體形は人によつてそれぞれ異なるものであるから,その人に適合した服をつくるには,その體形を基準とする必要がある。寸法をはかるには,整つた下着をつけ普通の姿勢をとつたところに,正しく紐尺を使ふ。胴廻りに細紐を卷いておくとはかり易い。なほ採寸については,正確を期するとともに禮儀の上からも,はかる際の體の位置,速度等につき注意することが大切である。

體形の實測箇所並びにその測定方法は,被服の種類或は測定の目的によつて一定しないが,一般には身體各部を長さ,幅その他の方向にはかつて示す。而してこれらの基準となるものは身長,胸廻りで,これと身體各部位との比率は,體型研究,體位測定上からばかりでなく,裁斷寸法の割出しにも利用されてゐる。

被服が着用者の體に適合し,且つその生活活動に適應するものでなければならぬことはいふまでもない。而して乳下りは圖のやうに脊からはかつた長さから後衿ぐりを引いたものである。前丈は,乳下りをはかる紐尺を更に乳の下邊りの胴廻り線まで伸ばしてはかつたもので,後衿ぐりを引くことは同樣である。







かかる機能的性能を具備する被服をつくるためには,まづその體形を基準として,その體形の取り得る姿態,動作や成長による變化等について研究を加へ,これらに適應した被服の形態意匠材質の選定をなすことが望ましい。

2. 原　型

(1) 胴

前中心を左,後中心を右にして前後の半身をかく。ゆるみは $\frac{6cm}{1寸6分}$ 位卽ち全體では $\frac{12cm}{3寸2分}$ 位とする。袖ぐりの深さは頸廻り線より下に $\frac{胸廻り}{4}$ をはかり,これを大體の標準とする。脇の線は前後の中央,或は $\frac{1.5cm}{4分}$ 位後に寄せてもよい。

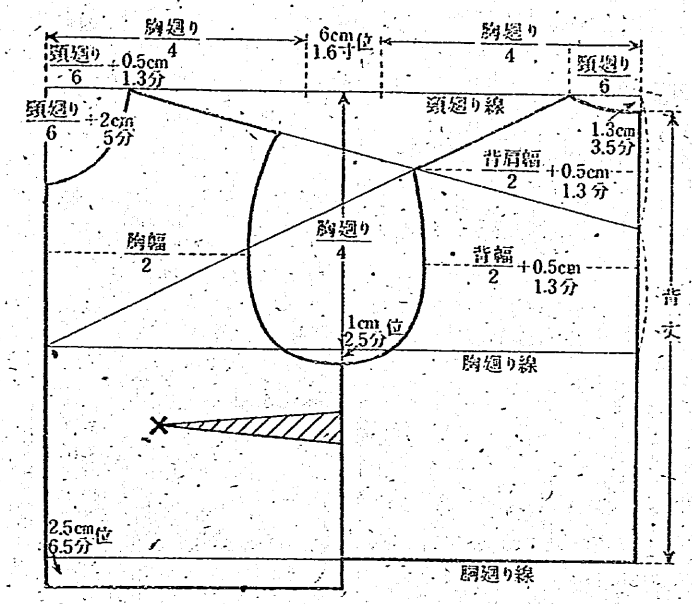
後

後衿ぐりは頸廻り線上に於いて横に $\frac{頸廻り}{6}$,縱に $\frac{1.3}{3.5}$ $\frac{cm}{分}$ 位くる。この衿ぐり線より背丈をはかり,後の胴廻り線をつくる。

圖のやうに後肩下り線上に,後中央より $\frac{背肩幅}{2}+\frac{0.5cm}{1.3分}$ をとる。袖ぐりのほぼ中央邊りで $\frac{背幅}{2}+\frac{0.5cm}{1.3分}$ をとり,圖のやうに袖ぐり線をかく。

前

前衿ぐりは横に $\frac{頸廻り}{6}+\frac{0.5cm}{1.3分}$ 乃至 $\frac{1cm}{2.5分}$ 縱に $\frac{頸廻り}{6}+\frac{2cm}{5分}$ をとつてくる。



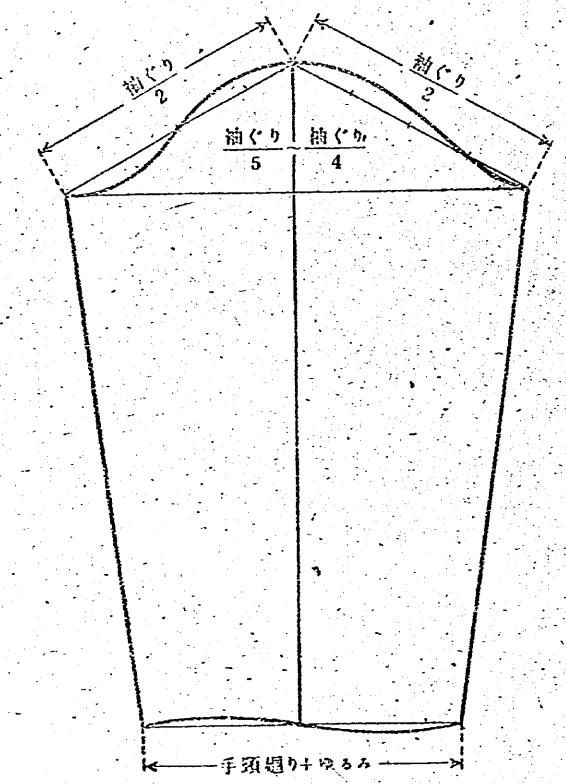
前肩幅は前肩下り線上に,後肩幅 $-\frac{0.5cm}{1.3分}$ 乃至 $\frac{1cm}{2.5分}$ をとる。胸幅をはかつた位置,卽ち前衿ぐりの中心より $\frac{5cm}{1寸3分}$ 位下つた邊りで $\frac{胸幅}{2}$ をとり,後よりやや深目の袖ぐり線をかく。

前下りは $\frac{2.5cm}{6.5分}$ 位にして,前の胴廻り線をつくる。また前丈をはかつて前下りを定めてもよい。この前下りは胸のふくらみの分であるから,脇で長い分は乳邊りの位置でつまむ。これを利用して服の意匠に應

じクセをつくる。なほ乳の位置を標しておく。

袖ぐりは胸囲根廻りの寸法に約二割のゆるみを加へたものとなるやう訂正する。

(2) 袖



中央線上に袖丈及び袖山の高さをとる。袖山の高さは，$\frac{袖ぐり}{5}$ 乃至 $\frac{袖ぐり}{4}$ を大體の標準とする。

袖山の中央より $\frac{袖ぐり}{2}$ をとり圖のやうに袖ぐり線をかく。

袖口は手頸廻りにゆるみ（10cm位 2寸6分）を加へて圖のやうにくる。

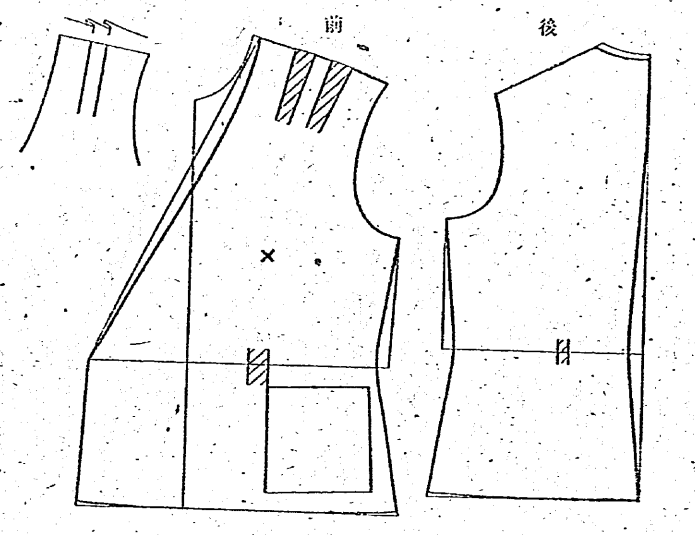
参考寸法

	大	中	小
身長	160cm 4尺2寸2分	153cm 4尺4分	145cm 3尺8寸3分
胴、廻り	86cm 2尺2寸7分	82cm 2尺1寸6分	76cm 2尺
腕廻り	74cm 1尺9寸5分	70cm 1尺8寸5分	65cm 1尺7寸2分
腰廻り	96cm 2尺5寸3分	92cm 2尺4寸3分	86cm 2尺2寸7分
腰丈	20cm 5寸3分	19cm 5寸	18cm 4寸7分
背丈	38cm 1尺	36cm 9寸5分	35cm 9寸2分
背・肩幅	36cm 9寸5分	35cm 9寸2分	34cm 9寸
背幅	34cm 9寸	33cm 8寸7分	32cm 8寸4分
胸幅	34cm 9寸	33cm 8寸7分	32cm 8寸4分
頸廻り	37cm 9寸8分	35cm 9寸2分	34cm 9寸
前丈	42cm 1尺1寸1分	40cm 1尺5分	38.5cm 1尺2分
乳下り	27cm 7寸1分	26cm 6寸9分	25cm 6寸6分
乳距離	19cm 5寸	18cm 4寸7分	17cm 4寸5分
袖丈	56cm 1尺4寸8分	53cm 1尺4寸	51cm 1尺3寸5分
手頸廻り	17cm 4寸5分	15cm 4寸	14cm 3寸7分
臨附根廻り	38cm 1尺	36cm 9寸5分	35cm 9寸2分
後〃丈	102cm 2尺6寸9分	97cm 2尺5寸6分	91cm 2尺4寸

3. 型紙の取り方

(1) 上衣

2圖　　1圖



後身頃

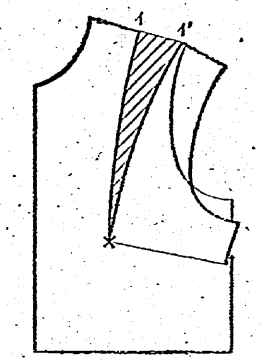
まづ上衣の丈を定める。上衣丈は實際の長さをはかるか,又は胴廻り線から $\frac{18cm}{4寸7分}$ 位を伸ばす。

後中央線は胴廻り線に於いて $\frac{2cm}{5分}$ 位くり入れる。

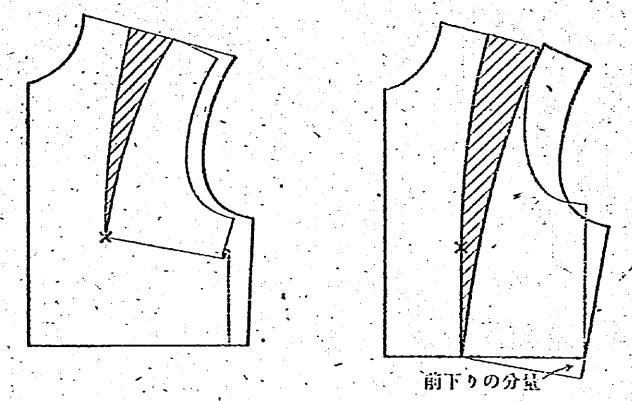
脇線は胴廻り線に於いて $\frac{1.5cm}{4分}$ 位くり入れる。裾は $\frac{胴廻り}{4}$ に $\frac{2cm}{5分}$ 位のゆるみを加へる。

衿ぐりは原型より $\frac{1cm}{2.5分}$ 位大きくする。

3圖



4圖　　5圖



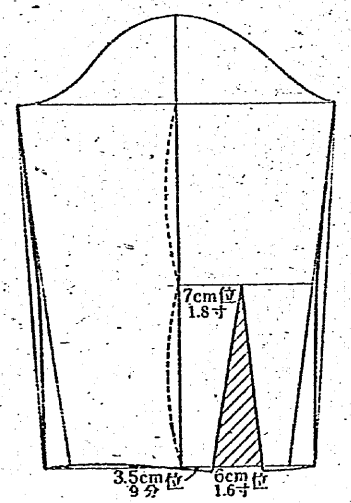
前身頃

3圖のやうに肩に切込みを入れ,脇で前下りの分をつまむ。

イイが肩のタセの分で,これを2圖のやうに二本のつまみとする。この分量を多くしたいときは,4圖のやうに更に横に加へるか,或は5圖のやうに開く。

1圖のやうに胴廻り線から後と等しく丈を伸ばし,脇の線も後と同様にしてつくる。胴廻り線に於いて $\frac{胴廻り}{2}$ に $\frac{4cm}{1寸}$ 位のゆるみをおき,更に餘分があれば圖のやうにつまむ。

前中心より重なり $\frac{22}{5.8}$ 乃至 $\frac{26cm}{6.9寸}$ の $\frac{1}{2}$ を出し,圖のやうに衿附線を定める。



衿下線は裾に於いて $\frac{1cm}{2.5分}$ 位擡げ,次に裾の線をかく。

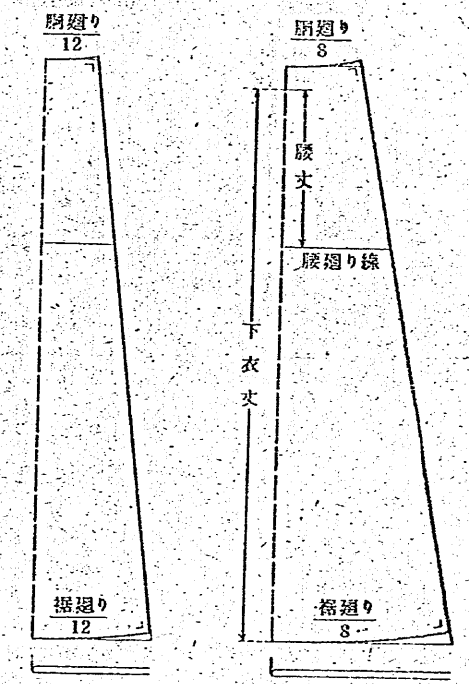
袖

袖口は原型よりつまみ分 $\frac{6cm}{1寸6分}$ 位を廣くし,これを圖のやうにとり袖口線をつくる。この縫の縫ひつまみ線は,手を自然に下げたとき,肘から小指に向かつて流れるやうにする。

中央で袖幅が廣いときは,圖のやうに適當にくる。

(2) 下　衣

接ぎ合はす布はいづれも同形となし,圖のやうに中央から二つ折にした簡易な方法を用ひる。



下衣丈は後丈から床上 $\frac{30}{8}$ $\frac{cm}{寸}$ 位を引く。下衣の胴廻りの寸法は,下着その他により差異を生ずることを考へてこれを定める。而してこの胴廻りのゆるい分は紐でかるくしめる。このために下衣丈を上部で $\frac{2}{5}$ 乃至 $\frac{3cm}{8分}$ 位長くしておく。腰廻り線に於いてゆるみをしらべ,不足の場合は鴨で出すやうにする。

4. 布の整理

織物は近時繊維工業の發達に伴なひ,仕上の工程が各方面から工夫され,美しい布味を出してゐる。かかる材料に對して再び手を加へることは,不經濟であるばかりでなく折角の布味をも損することになる。しかし,時勢に伴なふ繊維製品に適應した裁縫をなすには,常に研究的態度を以てこれが處理にあたることが大切である。

布を裁つ場合には,それに先立つて一應その伸縮度・染色度などをしらべ,しかる後裁縫及び着用後の手入などを考慮して,整理の要・不要またはその方法を定むべきである。特に新製品に對しては,よく研究して使ひこなすことが望ましい。消費者としての正しい批判・要求は,よりよい製品を生産せしめる上に大きな力となるものである。

5. 布の裁ち方

總用布は布の幅,服の大いさ,裁ち合はせの如何によつて相當の差を生ずるから十分計畫して購入する。而して布の經濟については,單に用尺の節約ばかりでなく,裁縫のことや着用後のことについても考察すべきである。

4. 布の整理

織物は近時繊維工業の發達に伴なひ,仕上の工程が各方面から工夫され,美しい布味を出してゐる。かかる材料に對して再び手を加へることは,不經濟であるばかりでなく折角の布味をも損することになる。しかし,時勢に伴なふ繊維製品に適應した裁縫をなすには,常に研究的態度を以てこれが處理にあたることが大切である。

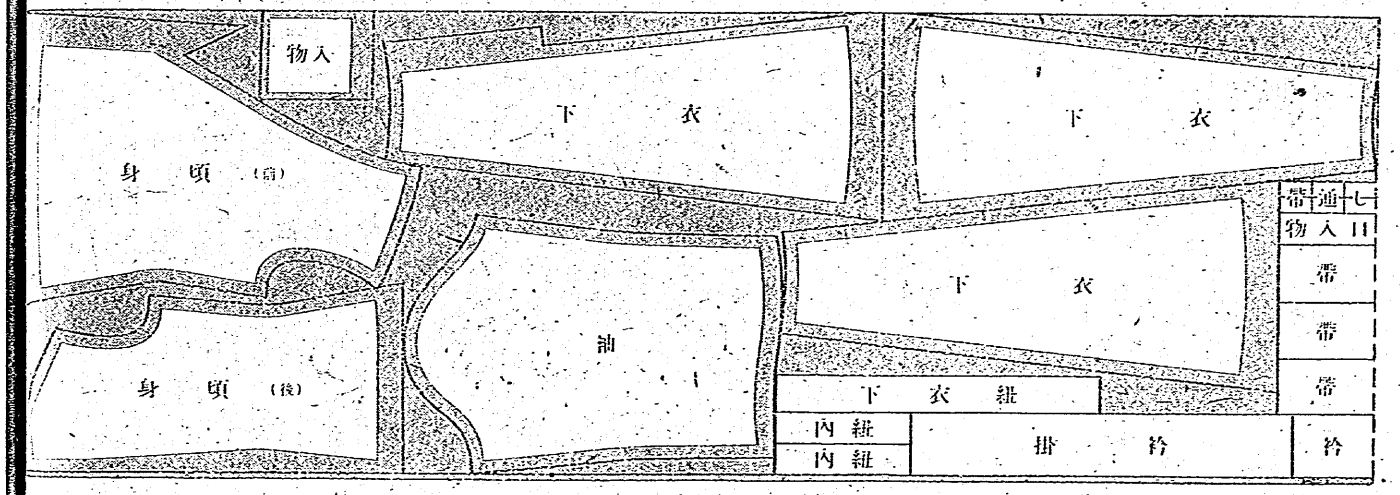
布を裁つ場合には,それに先立つて一應その伸縮度・染色度などをしらべ,しかる後裁縫及び着用後の手入などを考慮して,整理の要・不要またはその方法を定むべきである。特に新製品に對しては,よく研究して使ひこなすことが望ましい。消費者としての正しい批判・要求は,よりよい製品を生産せしめる上に大きな力となるものである。

5. 布の裁ち方

總用布は布の幅・服の大いさ,裁ち合はせの如何によつて相當の差を生ずるから十分計畫して購入する。而して布の經濟については,單に用尺の節約ばかりでなく,裁縫のことや着用後のことについても考察すべきである。

布の裁ち方

總用布　幅 73cm 1尺9寸3分　長さ 405cm 1丈7寸



備考　身長 153cm 4尺1分　胸廻り 82cm 2尺1寸6分

(1) 型紙の置き方

布の經・緯・斜の性質及び惑じを基準として考へ,布に傷のある場合にはこれを目立たぬところに廻す工夫が必要である。又殘り布はなるべくまとめて出すやうに考へる。

(2) 縫ひ代の附け方

型紙は全部出來上りの大きさであるから,適當な縫ひ代・折り代をつける。

上　衣

裾 $\frac{4cm}{1寸}$ 位,袖口 $\frac{3cm}{8分}$ 位とし,他は $\frac{2cm}{5分}$ 位とする。型紙の外に衿・掛衿・帶・内紐・物入等を適當な縫ひ代を加へて裁つ。衿幅は出來上り $\frac{3cm}{8分}$ 位,帶幅は $\frac{3.5cm}{9分}$ 位とし,用布に餘裕のあるときは,それぞれ縫ひ代が心布となるやうに裁つとよい。

裏附の場合は表は夏服と同じでよい。裏身頃は前後裾・袖口は型紙通りにし,他は適宜縫ひ代をつける。

下　衣

裾 $\frac{5cm}{1寸3分}$ 位,他は $\frac{2cm}{5分}$ 位,脇明はその始末に應じて適宜に縫ひ代を加へる。型紙の外には出來上り $\frac{2cm}{5分}$ 幅位の紐その他をとる。

6. 仕立方

假縫　一定の方法に基づく型紙の取り方では,各自

の採寸によつても各様の體形に少しの補正もなく合はせることはむづかしい。殊に簡易化した割合寸法を用ひるところには,實際に着用して合はせる必要がある。また布の使ひ方,布の味などにより型紙とは趣が異なるから,製圖で複雜に考へるよりも假縫による方が遙かに捷徑である場合が多い。

假縫は無條件に體形に布を合はせるのではなく,身體と布との間に適當な空間を與へながら,その人の體形に合ふ自然な美しい線を見出すとともに,生活活動に必要なゆとりを入れるものでなければならぬ。要するに假縫は,釣合ひのとれた着心地のよい服をつくるための重要な過程である。

(1) 假縫の仕方

前後中心には,必ず糸標をしてから出來上りの形に假縫ひ合はせをする。即ち上衣は前肩に二本の縫ひつまみをつくり,肩・脇を縫ひ合はせ,衿をつけ裾を出來上りに折上げておく。釣合ひはすべて本縫の場合と同様にする。例へば,肩は後の長い分をちぢめ,前をのばし加減にして合はせる。

袖は身頃の袖附線を檢討してから,假縫するとよい。裏附のものは表布だけでする。

下衣は各布を接ぎ合はせ,左脇上部を20cm 5寸3分縫ひ殘す。

裾は出來上りに折上げる。

(2) 體に合はせ方

假縫が出來たならば整つた下着の上に正しく着用し,次の諸點をしらべ,合はないところは補正する。この際下衣胴部のゆるい分は紐で輕くしめ,これを正しく落つける。假縫は,ただ靜止の狀態に合はせるばかりでなく,適當な動作をしてそれに適合させるやうにせねばならぬ。又縫ひ代のために判斷を誤ることのないやう注意すべきである。

上衣

ゆるみ 運動を妨げないやうに胸廻り・胴廻り・腰廻りその他に適當に入れる。體に密着したものは,肥滿型の人にも痩身型の人にもその姿態が明瞭になり過ぎてよくない。また發育途上にあるものは普通よりやや多い目に入れる。

縫ひ目の位置及び方向 イ. 肩合はせ 肩の線に從ふ。肩下りが身體に適合しない場合や前後の肩の釣合が適當でないときは,醜い線が出易いものであるから注意を要する。ロ. 縫ひつまみ 肩の二本の縫ひつまみは袖附と衿ぐりとのほぼ中間になるやう,長さは6cm 2寸4分位とする。身頃前後の脇のつまみは體形によりおちつきのよい位置・深さにする。ハ. 脇縫 體

の厚みの中央を眞直に下に流れるのがよい。

袖及び袖附　イ. 袖附　袖附の位置と附け方とは,服全體のしまりと腕の運動とに非常に影響するものである。卽ち身頃·袖のくり,袖のすわり,袖山の高さ並びに袖附の際のゆるみの入れ方などが相關聯して袖附を構成するものであるから,十分の研究と檢討が必要である。ロ. 袖　袖丈·袖幅縫の縫ひつまみ線の位置などを調べる。

丈　上衣の丈は腰部を覆ふ程度とし,なほ帶の位置及び上衣·下衣の丈の釣合ひが着用者に適するや否やを見る。

物入　大きさ及び位置を見る。

下衣

ゆるみ　胴部·腰部に應じて適當であるか否かをしらべる。

縫の縫ひ合はせの位置及び方向　脇の線やその他の接合はせ線は,それぞれの位置に於いて正しく下に向かつて流れるやうにする。それには各布の布目·縫ひ合はせの釣合ひ及び上部のくりの如何などが大いに影響するものである。

全體の形　波狀襞の出方·裾幅·丈等をしらべる。腰の形により上部のくりを訂正する。裾幅は脚

の運動を妨げないやうに注意し,丈は保健·體容を考慮して規格の精神に副ふやうにすべきである。なほ裾の線は床より前·脇·後などすべて同寸法,卽ち水平になるやうにする。これは單に假縫の際ばかりでなく,着用後も注意せねばならない。殊に裁合はせの具合で縫ひ合はせ目の布の斜の度が高い場合には,着用中これが甚だしく伸びて影響するところが多い。

本縫

上衣(洋仕立)

(1) 身頃

イ. 表の前肩の縫ひつまみ

ロ. 物入附

ハ. 表の背縫·脇縫　ともに縫ひ代は割る。

ニ. 表裾の始末　裾を折返して千鳥掛にしておく。

ホ. 裏の前肩の縫ひつまみ

ヘ. 裏の背縫·脇縫　背縫は 0.3cm/0.8分 のきせをみて奥を縫ふ。脇縫は割る。

ト. 表裏の脇とち

チ. 衿下の始末　裏の幅を少しひかえて表裏の衿下を縫ふ。表の衿下縫ひ代の多い場

Approved by Ministry of Education
(Date Sept. 25, 1946)

昭和廿一年九月廿五日　印刷
昭和廿一年九月三十日　發行
昭和廿一年十月一日　翻刻印刷
昭和廿一年十一月十一日　翻刻發行
（昭和廿一年十月一日　文部省檢査濟）

師範被服　本科用　一

定價　金壹圓七拾錢

著作權所有

著作兼發行者　文部省

東京都神田區錦町一丁目十六番地
翻刻發行者　師範學校教科書株式會社
代表者　森下松衛

東京都京橋區入舟町一丁目十一番地
印刷者　電新堂
代表者　新井修平

東京都神田區錦町一丁目十六番地
發行所　師範學校教科書株式會社